

# 小矢部市下中の聖徳太子南無仏調査報告書



## はじめに

吉江山光琳寺住職 吉江晃

前田義雄さんから、「公民館に ご安置している阿弥陀様の石仏とお太子様のご木像を後の人達にも大切にしていってほしい。

この由来を調べてもらえますか？」というような ご相談をいただきまして、改めて尾田武雄先生にご相談させていただいたら、令和6年1月1日の富山新聞に、大変大きな記事を書いていただくことになりました。ご年配の方の、後の人達を思う優しさが、形になったような記事で、本当に感動をさせていただきました。

親鸞聖人の書かれた『教行信証』の最後の方に、意識を載せさせていただきますが、「真実の言葉を集めて、往生（人が正しく生きていく）のための助けとしよう。なぜならば、前に生まれた者は後を導き、後に生まれた人は前を訪ねなさい。そのことが、連続して、途切れることなく、止まることがないように願うからです。なぜならば、はてしなく迷い苦しむ人々を、すべて救いたいと願うからです。」という文章があります。

僧侶のしていることは、このことに尽きると言ってもいいと思いますし、まさに、前田さんが願ってくださったことも、この「後の人達を思う優しい願い」だったと思います。本当に、下中のお太子様と阿弥陀如来像のお世話をしてくださったすべてのご先祖の方々に感謝申し上げたいと思います。本当に、素晴らしいご縁をいただき、感動をさせていただきました。ありがとうございました。

合掌

## 小矢部市下中の聖徳太子南無仏調査報告書

所在地 小矢部市下中 411 下中公民館  
伝来 元近くの路傍の太子堂に安置されていた。後に公民館に移転し安置する  
品質構造 木造、寄木造り。目に玉眼が入る。  
法量 高 65 cm 幅 25 cm  
像容・所見 聖徳太子二歳像で、二歳の時東に向かって「南無」と称えられたとされるいわゆる南無仏である。上半身は裸で、雪のような白い漆を塗り、下半身は緋の袴を着ける。  
頭部には毛が無く、面相は面長で、目はやさしく下向きである。胸の前で力強く合掌している。下腹部に袴の帯を結んでいる。足首は別造りで、離脱して台座にのっている。  
制作時期 明治 42 年(文書より)

銘文 下部のほぞに「高岡市通町 上大佛師 北本吉蔵作」とある。  
文書も残り表紙に「明治四十二年 太子様 太子堂 建立費寄附帳 発起人」  
文書によると「高岡佛師屋ニテ 太子様壺タイ 代金五円ニテワタシ」とある。  
高岡市の仏師に五円にて制作していただいたことがわかる。

仏師 高岡市通町 大佛師北本吉蔵は、最近砺波市東保浄光寺の砺波市指定文化財「見返り阿弥陀」の作者と同一者である。北本吉蔵作の聖徳太子南無仏は、ほかに高岡市春日路傍、南砺市高儀路傍、砺波市太田専念寺境内にある。

調査・観察 令和5年 11 月 17 日(金)小矢部市下中 下中公民館にて

砺波市文化財保護保護議委員会前会長	尾田武雄
真宗大谷派光琳寺住職	吉江晃
郷土史家	経沢信弘
下中地区区長	深田数成
地区民	前田義雄
同	松本よしみ

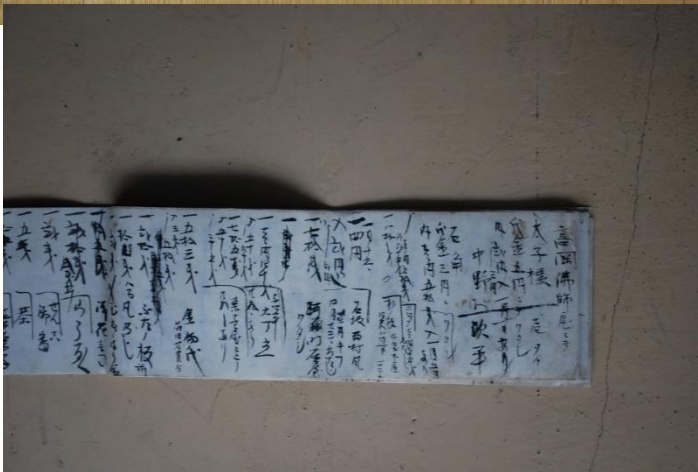
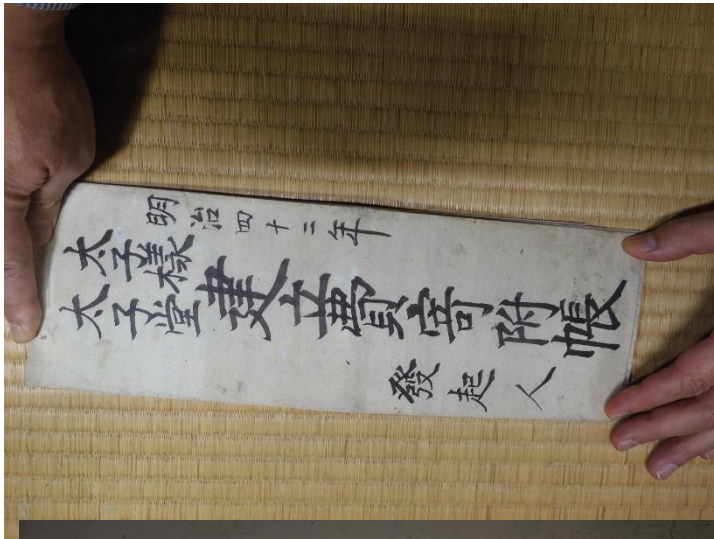


ほぞの墨書



台座の墨書

明治四十二年 太子様太子堂 建立費寄附帳



「高岡佛師屋ニテ 太子様壺タイ 代金五円ニテワタシ」

## ○参考

### 南無仏太子石仏について

尾田武雄

富山県西部の農村地帯を歩くと際立って豪華なお堂を見付けることができる。そしてその中には、上半身裸で、腰に赤い袴姿の聖徳太子像であると告げると、驚かれたりする。

地元の人には「タイッシンサマ(太子様)」と愛着と親しみをこめて呼んでいる。地蔵様とはあきらかに区別されている。富山県は石仏の悉皆調査が古くから行われ、その成果で多くのことが解ってきた。南無仏太子石仏もそれによって、全容が理解できるようになった。

#### ・その分布

富山県内には南無仏太子石仏は約二百体強がある。それを地図上に落としてみると、瑞泉寺を中心に半径二十キロメートルの範囲内に多くあり、特に瑞泉寺から北西の散居村の展開する地域、つまり砺波市北西、小矢部市南東に厚く分布していることがわかる。また丁寧に眺めると同じ真宗寺院である高岡市伏木勝興寺(浄土真宗本願寺派)の勢力圏、また城端町善徳寺(真宗大谷派)の勢力圏にこの太子像が少ないことが解る。勝興寺に近い高岡市吉久にあるものは、明治時代にこの地で消石灰を焼いていた砺波の人々の造立である。小矢部市の石川県境の山間地にある太子像石仏は、砺波地方から嫁いだ人の造立によるものである。

大沢野町松野の小堂にも南無仏太子像石仏が入っている。これは近くの石黒家の造立によるものである。これは石黒家の先祖は庄川町青島に住んでいたが、明治後期にこの大沢野町の台地の開拓に入られた時に、手次寺である井波町誓立寺から拝受されたものである。ここにはこの石仏にまつわる文書も残されている。

#### ・造立の時期

明治十二年九月一日、瑞泉寺香部屋より出火して本堂や太子堂が全焼した。翌年十三年五月に棟梁松井角平により本堂の起工式が行われ、十八年には本堂が完成し、仮遷仏が行われた。この当時経済界は不況で、建築費の調達が思うにまかせなかった。そこで瑞泉寺の宝物である南無仏太子像や絵伝の巡回開扉や絵解きを行い浄財を集めるようになったのである。また石仏そのものも、この巡回先に展開するように分布している。そして南無仏太子像石仏の在銘年次は明治二十年頃から多くなり、大正七年瑞泉寺太子堂の建立までの間に集中して造立されている。ちょうど流行神のようである。

#### ・造立した人々

南無仏太子石仏について、その造立の意図を調査してみると明治後期の造立はムラに神社が無いから、また若者がなにかの記念に造立というようなムラ全体で造立する場合が多い。南般若石丸の集落では、井波町瑞泉寺での相撲大会で優勝しその賞金で太子石仏をお迎えしている。石仏は死者供養の意味合いが強いが、なにかめでたさを感じる造立である。山田村や砺波市の山間部では神社の境内に太子堂を設置しそこに南無仏太子像石仏を安置していると

ころがある。

大正期から昭和にはいと、造立の意図も個人的で死者供養の雰囲気での造立が多くなってくる。

#### ・ お堂とお祭り

八尾町足谷には、大きい木を抉り祠風にしたお堂や同町窪には石を抉った祠の中に安置されている。また砺波市野武士には明治の名工藤井助之丞の造った小堂に、鎮座する南無仏太子石仏がある。

砺波平野の散居村の広がる地域は、同じような川や道、そして家々がある。そして目印になる山は遠く、道に迷ってしまうのが現状である。まして田んぼの基盤整備がなされていない時期にはなおさらのことである。そこで、これら石仏が道しるべとして重要な位置を示していたのである。マップポイント的な存在であったのである。聖徳太子は職人に信仰されていたので、そんなことから宮大工、壁職人、彫刻職人、石屋、瓦職人達は腕を競い豪華で立派なお堂を造ったのである。

祭りは農閑期に行われることが多く、民俗宗教に薄い真宗の僧侶が関わることが多いが、砺波市東別所のように集落の長老が中心の読経しているところもあり、地域に根付いている南無仏太子石仏の祭りである。

いわゆる南無仏太子像は、「日本の釈迦」とたとえられた聖徳太子の二歳のこの像は『聖徳太子伝暦』に、太子二歳の二月十五日の朝、「始めて手を合わせ、東に向い南無仏と称え再び拝したまい。人の教えに因らず」とあるのを基づいて造られたものである。上半身が裸で、腰に緋の袴をつけ、正面に向かって合掌する童形像である。二月十五日は釈尊入寂の日であり、太子の掌に舍利が握られそれがこぼれ落ちたと伝えられている。

法隆寺の舍利殿はそのときの舍利を祀ったものだといわれている。太子が釈尊の生まれ変わりであるという信仰が定着したとされている。

太子像にはこの他にも、十六歳の父の病氣平癒を祈る孝養太子像、二十七歳の時甲斐国から献じられた黒駒に乗って富士山に登る黒駒太子像、太子四十二歳の摂政太子像、また旧一万円札に使われた聖徳太子二王子像などが知られている。また職人の太子講の掛け軸には、曲尺を持った太子像もある。

東に向かい「ただ南無仏」と称え、仏に帰命し帰依する想いは裸の童子の姿に象徴されるのかもしれない、法然や親鸞の「ただ念仏」、また道元の「只管打座」、日蓮の「ただ唱題」に通じるものである。とりわけ「ただ念仏」には深い共鳴があったろうと想像することは難くない。浄土真宗の開祖親鸞は、太子によって導かれ育てられた。二十九歳の煩悩に苦しむ時、聖徳太子の建立と伝えられる京都六角堂に籠り修行をしたが太子の夢告により、開眼したとされている。

この「ただ南無仏」のけなげな像は、県内の真宗寺院には数多く安置されている。例えば氷見市飯久保の光久寺(真宗大谷派)は県指定文化財の茶庭があり知られているが、ここには鎌倉時代にさかのぼることが出来る玉眼の入る木造の像があり、また富山県西部の真宗寺院には本

堂に安置されている場合が多い。上平村楮の聖光寺(真宗大谷派)にも木造の南無太子像がある。寺伝によれば寿永二年(一一八三)平家末流の篠塚某がこの聖徳太子をこの村の氏神として安置するのが始まりであるとしている。

井波町瑞泉寺は、本願寺五世綽如が明徳元年に創建された真宗寺院である。弘化四年以来、阿弥陀如来の安置される本堂と、南無仏太子像が安置してある太子堂と並列して立っている。(これらともに明治十二年に火災に遭いその後には再建されている。)江戸時代初め頃より、城端町善徳寺と共に越中東方寺院の触頭の位置にあった。この瑞泉寺の特色は、真宗寺院でありながら太子堂が在るということであり、七月二十一日から二十九日に行われる「太子伝会」である。寺伝によれば、綽如が宮中で聖徳太子伝を講じ、その賞として聖徳太子自刻の二歳像の尊像と太子絵伝を下賜されたという。その二歳像と太子絵伝の虫干しを兼ね一般公開され、それが「太子伝会」である。秘仏の二歳像の開扉、太子絵伝の絵解きなどが行われ、この行事は隆盛を極めていた。

ここにある南無仏太子像は高さが六十四センチ、肘幅二十センチ、胴幅十一センチである。非常に写実的で、二歳像ながら威風堂々としたその姿に、鎌倉時代の作風が感じられるものがある。

この地に、本格的に真宗の教線が延びたのは蓮如の文明三年の吉崎進出以後と思われるのに、これら南無仏太子像は真宗以前の、信仰の遺物として理解したい。真宗史と太子信仰の、新しい視点として井上鋭夫氏の研究が注目される。新潟県岩船郡の山間部の村々に「タイシ」と呼ばれる真宗門徒がいて、鉾山採掘に従事した人々であったとされている。鉾山経営者が修験者であり、修験者は虚空蔵・蔵王・阿弥陀・大日を祀り、一段低いとされる人々に太子信仰を求めたのではないかとされ、その「太子」が「聖徳太子」であることを教え、それが阿弥陀信仰に昇華させて門徒化していったのだとされている。また河川の筏流しなどの「ワタリ」の人々も同じ意味合いを持つとされている。

この富山県内の古い南無仏太子像は、どのような意図で造立されたかは解らないが、真宗流布に少なからず影響があったはずである。この瑞泉寺周辺には、南無仏太子像の石仏が多い。真宗風土の地方の信仰のあり様かもしれない。

#### 小矢部市下中の南無仏

令和元年 8 月 23 日、小矢部市下中の光琳寺吉江晃住職より、同公民館に安置される南無仏とのお堂についての長帳の文書「明治四十二年 太子様太子堂建立費寄附帳 発起人」と「昭和貳拾六年十二月 太子堂再建寄附帳 発起人」2 冊を見せていただいた。砺波地方を中心に南無仏の石仏等が 277 体報告されているが、このような文書が残されていることが珍しい。南無仏は明治 20 年頃から大正前期の約 30 年間に造像されているが、その脅威的な数に驚かされる。これらのお像は石仏が多いが、木像は極めて少なく、おおよそ十数体であろう。

下中公民館に安置されるものは、平成 8 年 7 月の調査時には道端のお堂に置かれていたもので、近年ここ公民館に収められたものである。その時の法量は高さ 65 センチ、幅 23 センチで

あり、やや大振りのお像である。文書によると「高岡佛師屋ニテ 太子様壺タイ 代金五円ニテ ワタシ」とある。高岡市の仏師に五円にて制作していただいたことがわかる。彩色の後も残り、元はきれいなお像であったことが想像される。5 円という代金は、石造よりも高価であったろうと思われ、太子堂も建築され、明治の四十年代は下中の地区は、豊かで生き生きとした状況がうかがい知れる。そのような心情を理解して、下中に生まれ育ったという誇りと、これからの生甲斐にもなることを、この太子像が教えてくださっている。



調査風景



## 小矢部市下中の太子堂

小矢部市下中公民館内の片隅に、木造聖徳太子南無仏と石造阿弥陀如来坐像が安置されている。元は主要道路の交差点近く(現宮田清宅前)に建立されていたようである。地元には「明治四十二年 太子様・太子堂建立費寄附帳 發起人」の墨付き十五丁と、「昭和貳拾六年一二月 太子堂再建寄附帳 發起人」の墨付き十二丁がある。これの長帳によって太子堂について検討したい。

明治四十二年

長帳「明治四十二年 太子様・太子堂建立費寄附帳 發起人」には、百三十名の寄付人の名が記され、寄付金額及び入金総額が貳拾円七十三銭集まっている。支出としては「太子様壺タイ 代金五円ニテワタシ」とある。



### 入金部

一、壹九円八拾九厘 惣  
一、十銭 佐野喜次郎  
一、貳拾銭 石名田  
一、貳拾四銭 兵武人足代  
一、十五銭 孫平人足代  
一、十五銭 赤倉人足  
〆 貳拾円七十三銭

### (出金部)

一、五円 高岡 太平氏  
一、三円二十五銭 中野石厘  
一、八十銭 八□□  
一、四円 □木  
一、一円四拾銭 六丁立  
一、七拾五銭 菓子  
一、五十三銭 金物□□□  
一、貳拾銭 □□  
一、壹拾一銭 瓦ノヅ  
一、八銭□□ 弓□□□  
一、二銭 フコ  
一、五銭 茶  
一、拾一銭 茶菓子

一、四拾錢	寺之志
一、八錢	紙式丁
一、七拾錢	□□□
一、七拾錢	開式志
一、十錢	ろ□□□
一、十錢	煮代
一、四錢五	インシ
一、二錢	食赤
一、六拾錢	花火
一、貳拾一錢	
一、貳拾錢	志箱金物
一、十五錢	金物
一、四拾錢	河原町石屋
一、四拾八錢	平蔵車代
一、參拾錢	吉井車代
出 貳拾円七十九錢	
入 貳拾円七十三錢	
六錢	

明治四十三年四月記之

### 昭和二十六年十二月の太子堂再建



「昭和二十六年十二月 太子堂再建寄附帳 發起人」の長帳がある。初めに百六十一名の寄附者の名前が記され、収入合計が金壹萬貳千六百拾圓で支出は金壹萬四百參拾五圓となっている。長帳のさいごの丁に次のように記されている。

「世話人

中川徳太郎  
 佐野一郎  
 林重太郎  
 児島甚政  
 吉江栄七郎

槻尾喜太郎

發起人

前田源造

槻尾久造

宮田兵作

扇谷正道

深田兵二

」

世話人中川徳太郎、佐野一郎、林重太郎、児島甚政、吉江栄七郎、槻尾喜太郎の六名が名のあり、發起人に前田源造、槻尾久造、宮田兵作、扇谷正道、深田兵二の五名の名が連ねている。

主な支出として「一、壱千貳百円ニ太子堂ワタシ 及金八百円(一月二百円手金 二月六百円) 狐島紫藤中村」とある。狐島紫藤は大工であったのか。また支出として「参千円 左官代」が大きい金額である。

平成8年7月の写真(尾田武雄撮影)



## 資料

### 下中公民館前 太子様太子堂の今後について 29, 11, 26

この太子様・太子堂の発祥は、明治 42 年(西暦 1909 年)地元下中有志の方々の思いで 108 年前に下中の元主要道路の交差点近く(現宮田清宅前)建立されたようである。

( ① 建立寄付金帳があった )

その後、42 年後の昭和 26 年(西暦 1951 年)再建されています。

( ② 再建寄付金帳があった )

さらに、時期は不明ですが、河川改修・道路拡幅工事のため移転が求められ、現在の下中公民館前に移転をしたものと思われます。移転費用等は、補償金等で賄われたのか資料等はありませんでした。

現在、風雨に晒されお堂は、一部外面はぐれ落下し、極めて劣化、正面の一部ガラスは沈み、風の強い日には、雨水が吹き込むことが予想されることから中に安置されている太子像の痛みも考えられます。

27 年 6 月、浄行寺住職さんに相談をして、お堂前に来ていただきました。

浄行寺さんは、建立時期や、建立者名前が太子堂または、太子像のどこかに、記載されているかも知れないとの思いで、太子様のお立ち台の裏面を見ました。時期の記載はなかったが、発起人①の次の方の記載がありました。

- |                    |                |
|--------------------|----------------|
| ①・梶尾久蔵 (梶尾登喜子の義祖父) | ②・梶尾久蔵         |
| ・宮田兵作 (宮田孝一の祖父)    | ・宮田兵作          |
| ・前田源造 (前田義雄の祖父)    | ・前田源造          |
| ・扇谷仁吉朗 (扇谷賢一・清二の父) | ・扇谷正道(仁吉郎の弟)   |
|                    | ・深田兵二<亡深田誠二の父> |

前田源造は、井波別院、城端別院の同行をしていた縁と太子堂の近く家があったこと等から、先の寄付金帳があったものと考えられます。

また、前田源造が健在な頃は、毎年お盆に、近隣の方から志を頂き、浄行寺様をお迎えし、太子堂の前でお供え物をあげ、お経をあげていただき、その後、参列者(子供たちも含め)の方にお供え物を配っていたことを覚えています(前田義雄)

27 年 6 月、太子堂の劣化進んでいることから、お堂の再々建立にどの程度の費用がかかるか業者(萩石材)相談してみました。(見積りは別紙のとおり)また、別案として、この時代、相当額の浄財(寄付金等)として、この時代、相当額の浄財 (寄付金等)募るに難しいと考えられることから、公民館地蔵堂内に安置していただくことが出来ないか検討致しました。

又、深田誠二さんに、そのお堂の中に深田さんの子供像が一体安置されてこともあり、(これは、どの時代に安置されたか、わかりません)お堂を再建するか、公民館の地蔵堂に安置を依頼する 2 案を相談したところ、深田さんは、子供像を撤去され、深田家のお墓の横に安置され

ました。・・今日に至る

下中公民館前太子堂の今後について〈経緯〉

29. 11. 26 PM2:00～

3:30(前田宅)

宮田孝一・扇谷満夫・扇谷清二・前田義雄・槻尾登喜子(欠席委任)

別紙 1 について発起人関係者によって現状と今後の方向付け等について話し合う。

- ・下中公民館内の地藏堂横に安置がよいとの意見が多い
- ・区長さんに相談しよう

29. 11. 27 AM8:30～9:20 〈区長宅〉

津田区長・前田義雄

別紙 1 をお見せし、先の〈11・26〉話し合いを受けお話をする

- ・区長としては理解できます。費用等については、今後検討をすることとしますが、村委員会が、1 月にないと行なわれません、村委員総意が必要となりますので、お待ち願います。

29. 11. 28

前田義雄

太子堂建立寄付金張が相当の痛みがあり、今後、多くの方に見て理解を頂くのには、このままでは、適切でないとの判断から裏打ちを業者に依頼をする。

小矢部市のかさおか店・砺波市の田辺表具店に相談する。

田辺表具店に依頼する。(12,2 出来上がる(14,000 円))

29. 11. 28

扇谷清二・前田義雄

太子像を安置する場合には、像をそのままとは、いかがなものかと考えられるから、厨子(仏様をお入れする箱櫃)を業者に相談する。

大越仏壇(休日)山内仏壇・・担当者に現状(大きさ等)、を説明し、相談見もり依頼をする。

29 12 1

前田義雄

大越仏壇へ、上記同じ説明をいたし、見積り依頼をする。

29, 12, 2

山内仏壇より見積価格が出る。白木のまま 80,000 円(別紙)

29. 12. 3

前田義雄・浄行寺住職・津川清信 林国夫(砺波下中)

浄行寺において、水島勝満寺回り報恩講が終わった後、上記の経緯等について、簡単にお話し、意見を聞き、協力をお願いする。

- ・広く相談が必要、(砺波の区長さんにも必要)
- ・相応の理解を頂く。

29.12.5 PM1: 40～3:00

宮田義之・美智子・前田義雄

上記経緯等について説明相談する

- ・建立寄付金帳に関心をもたれ、下中全体で建立されてものと判断できます(多少濃淡はありますが) 広く意見を聞くことが大切と思います。
- ・再々建立の費用や補修、厨子の仕様や価格等も聞かれました。
- ・1年くらいの時間をかけても、村の慎重な検討と総意が重要とのお話がある。

29, 12, 8

- ・厨子の見積書を大越仏壇よりもらう。250,000円(税別) 別紙

塗りを行い、外枠を丸く、前面に一部目隠した箱壇。(職人さん気質がある)

- ・趣意書案の検討・作成する。

29, 12, 9

- ・扇谷清二・宮田孝一・前田義雄

現在までの経過報告今後対応について話す。各見積り案を説明

趣意書案の感想を伺う

- ・扇谷清二・前田義雄・槻尾久信・君代

下中の太子堂について、今までの経緯について話し意見を伺う

- ・太子堂がこのような形で作成されていることに興味・寄付金帳に関心をもたれました。
- ・今後の対応等は、下中(砺波市を含む) 全体の総意で判断するものである。

私は、現在の公民館前の花壇地に新たに太子堂の移転建設の検討も必要と考える。

理由 砺波下中の方々は、参拝に違和感及び太子さんと地藏さんとの同居への違和感がある。又、各人の負担感大きくないのでは。

下中地区委員会 様

30, 8, 14  
世話係り

下中公民館前太子堂劣化に伴う聖徳太子像遷座にかかる費用等

- |   |                  |
|---|------------------|
| ①厨子等製作費用(厨子・厨子台・三具足及び台)                                     | <u>248,400 円</u> |
| ②お堂の取壊し・残石処分・埋め戻し費用   | <u>59,400 円</u>  |
| ③遷座 (移転)のお勤め等 (30, 8, 9) の費用                                | <u>27,380 円</u>  |
| ・ご寺院(浄行寺 光琳寺) お布施   | 20,000 円         |
| ・お花   | 3,000 円          |
| ・お供え(おけそく)  | 3,600 円          |
| ・お茶菓子(ご寺院)  | 780 円            |
| ④直会費用   | <u>13,300 円</u>  |
| ・料理   | 10,000 円         |
| ・ビール(10 本)  | 3,300 円          |
| ⑤その他  |                  |
| ・聖徳太子像の製作及び太子堂建立過去の寄付帳(明治 42 年・昭和 26 年)<br>保存のため修復(表具師裏打)費用 | <u>14,000 円</u>  |

合計 362,480 円

なお、遷座お勤めに下記の方からお供えがありました。

- ・今村仏具店(清酒 2 升)
- ・お世話係り【扇谷清二・前田義雄・扇谷賢一・宮田孝一・槻尾登喜子】  
(清酒一升・呉羽梨 1 箱)

くつた 神事は金目大  
殿詞を唱和し、大伴泰史  
宮司が祝詞を奏上した。切



茅の輪を射

おはいを急げ参列者  
富山新聞 富山新聞社

場無料。問い合わせは、障友  
会事務局(076(441)  
3371)まで。

# 木像「南無仏」と判明

## 明治期制作、台座に墨書

### 小矢部・下中の太子像

小矢部市下中公民館に安置され、地元住民に親しまれている太子像が、明期に作られた木像の「聖徳太子南無仏」であることが分かった。これまで制作された年代や経緯は不明だったが、台座と墨書が見つかると、砺波地方に属する南無仏約270体のうち10体ほどしかない木像である上、高度な技法が使われていることも判明し、住民は賑々と拝していた太子像に思いをはせながら「地区の宝」としての認識を深めた。



太子像(左)を参拝する住民

小矢部市下中公民館

### 「地区の宝」住民実感 隣の石仏は甚右衛門作

前砺波市文化財保護審議委員長の尾田雄氏(75)が調査に当たり、確認した。像は聖徳太子が2歳の時、東を向いて手を合わせ「南無仏」と唱えた伝説に基づき、上半身は裸、下は

太子像の台座やぼろの部分に残っていた墨書



赤い袴姿で、くつらした体つきで手を合わせた。住民によると、公民館から約300メートルにあったお堂にまつられていたが、区画整理で公民館前に移されたお堂の老朽化に伴い、2018年8月から館内に安置されていた。尾田氏が調査したところ、台座を除く像本体の高さは約60センチ、密工造りで、像の部分に水島ガラスを使った「玉眼」が施されていた。彩色の跡も残っており、高い技巧が凝らされていることが分かった。さらに、像下部のぼろの部分に「高市通町 上天 佛師 北本吉蔵作」との墨書が確認された。北本吉蔵は明治期に活躍した天竺師で、像は北本が作った明治期の作品と特定された。関連文書も見つかり、1909(明治42)年に地元住民から円仏師に制作を依頼した旨が記されていた。像の台座には発掘者4人の名が墨書で残っていた。5円は現在の約12万円に相当し、石仏の価値が高かった。お堂の建立と合わせると、明治40年代の下中地区は比較的豊かだったことが読み取れるという。

太子像の隣に置かれていた石仏の阿弥陀如来像の調査も併せて行われ、江戸後期に活躍した井波石工、甚右衛門が彫ったものと分かった。石を刻んで細工をする職人で、砺波地方で甚右衛門の銘が入った石仏の確認は4体目となる。本体の墨は74号と一般の石仏より大きく、高度な技術が光る。

下中地区の深田教成区長(66)は「地区の宝とあるので実感した。次世代に伝えていきたい」と話した。尾田氏は「いずれも大切に保管されていた。像は信仰の対象だけに詳細に調査するのは難しく、関係者に感謝したい」と語った。

### キャンプで越年28組 南砺・関兼寺公園 県外からも利用

南砺市井波地域の関兼寺公園キャンプ場で31日、年越しキャンプが行われ、県内外28組の愛好者や家族連れが大自然に囲まれた中で新年を迎えた。



年越しキャンプ



## あとがき

砺波地方の道端には、きれいで堂々たるお堂の中に、あどけない上半身雪のような肌で、下半身は緋の袴をはいた聖徳太子二歳像(南無仏)が安置されている場合が多い。現在 288 体を確認している。これは明治後半から大正期の約 30 年間の間に造像され、多くは石造である。こんなにも多くこの地にあるのは、井波別院瑞泉寺に関りがある。瑞泉寺は明治 12 年に本堂、太子堂、庫裏などを焼失した。18 年には本願寺からの借財などで、なんとか再建できたが、太子堂が再建の目途がつかなかった。本願寺への返済、そして太子堂の再建に、農閑期の冬季などに、瑞泉寺の宝物や太子巡行が行われ、浄財の募金活動が行われた。巡行の他には、太子堂再建相撲大会や太子講などが積極的に開かれ、大正 7 年には太子堂再建が叶った。

長帳「明治四十二年 太子様・太子堂建立費寄附帳 発起人」によると、下中公民館にある南無仏は、明治 42 年に御堂と共に建立されたことがわかる。これは貴重な資料である。また長帳「昭和貳拾六年十二月 太子堂再建寄附帳 発起人」によると、昭和 26 年に太子堂が再建され、平成 30 年には資料「下中公民館前太子堂劣化に伴う聖徳太子像遷座」のように下中公民館に南無仏は安置されるようになった。

288 体の南無仏は野にあるが、それはほとんど石造であり木造は 10 体程度である。石造は野においても朽ちることはないが、木造はお堂に安置されるものである。2 度のお堂建立がされたが、3 度目は地域のコミュニティの場である公民館に移されて事は、地域に方々の信仰の篤さを知ることができた。

私自身も、この調査に関わらせていただき、信仰心が薄くなっていると現代に、脈々と庶民の間に真宗の教えが息づいていることを体現することができてうれしく思っている。

尾田武雄

---

## 小矢部市下中の聖徳太子南無仏調査報告書

編集 尾田武雄

939-1315

富山県砺波市太田 1770

電話 0763-32-2772

発行 令和6年2月15日

発行所 真宗大谷派吉江山光琳寺

932-0804

富山県小矢部市下中 368